

天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る

—キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査(2022年)—

山藤 正敏 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員
 大谷 育恵 京都大学白眉センター特定助教
 齊藤 茂雄 帝京大学文化財研究所講師
 山内 和也 帝京大学文化財研究所教授
 バキット・アマンバエヴァ キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所部長

In Pursuit of Ancient Pastoral Nomadism in the Northern Foot of Tien Shan Mountains: Archaeological Research in the Kegeti Valley, the Kyrgyz Republic (2022)

YAMAFUJI, Masatoshi Senior Researcher, Nara National Research Institute for Cultural Properties
 OTANI, Ikue Assistant Professor, the Hakubi Project, Kyoto University
 SAITO, Shigeo Lecturer, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
 YAMAUCHI, Kazuya Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University
 AMANBAEVA, Bakit Head, The Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic

1. はじめに

キルギス共和国北部、チュー渓谷東部には、6世紀におけるソグド人の進出に伴い建設されたシルクロード拠点都市の1つであるアク・ベシム(Ak-Beshim)遺跡が所在し、11世紀のカラハン朝にかけて居住された。中央アジアではシルクロードの中世都市に着目した研究が盛んであることから、当該地域においてもアク・ベシム遺跡と近隣の関連都市遺跡に長らく考古学調査の主眼が置かれてきた(Бернштам 1950; Кожемяко 1959; 城倉他 2016; 山内・アマンバエヴァ編 2016; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020、2021等)。他方で、都市周辺の当該期における遊牧民の活動については、その痕跡が捉えにくいことも相俟って、本格的に調査対象とされることがなかった。

こうした調査状況を念頭に、本研究はアク・ベシム遺跡周辺における古代遊牧活動を明らかにし、都市定住民との関係性を体系的に理解することを目的として、同遺跡南方にそびえるキルギス・アラトー(Kyrgyz Ala-Too)山脈の北麓に位置するケゲティ(Kegeti)渓谷を最初の調査対象として、考古学踏査を実施した。本年度の調査成果として、墳丘墓(Kurgan)から成る墓域や周溝と周堤から造られる小型遺構群を確認することができた。

2. 対象地域

本調査計画の調査対象地域は、アク・ベシム遺跡南方約15kmに位置するキルギス・アラトー山脈北麓一帯であり、最大で東西幅20kmに及ぶ(図1)。地域内には5つの川が南から流れており、これらのうち西端のケゲティ川と東端のシャムシー(Shamshy)川が主要河川を成し、対象地域の中では縦深の深い渓谷を形成している。渓谷の面積が十分に広く、家畜の放牧を行う際にも有利な地形とみなせるため、これらの両河川沿いにおいて現地調査を重点的に行うことにした。現地調査の初年度である本年度は、西端のケゲティ渓谷に調査の焦点を絞った。

ケゲティ渓谷は、アク・ベシム遺跡から直線で約13km南南西に位置する。渓谷の入口部分は幅約2kmと広く、特に東岸に耕作地として利用可能な平坦地が広がっている。渓谷を南に5km程進むと、ケゲティ川東岸に台地状の地形が現れる。台地は、西側をケゲティ川、東側と南側をケゲティ川に合流する小河川に画された平面涙滴形を呈し、最大で東西1.9km、南北4.4kmを測る(図2)。台地上は、北半部において東から西に傾斜する平坦な緩斜面が少なくとも3つ東西に連続しており、最大で東西1.2km、南北2.3kmの草原地帯を形成している。一方、台地上南半部には南北方向の小谷が7本程度平行しており、

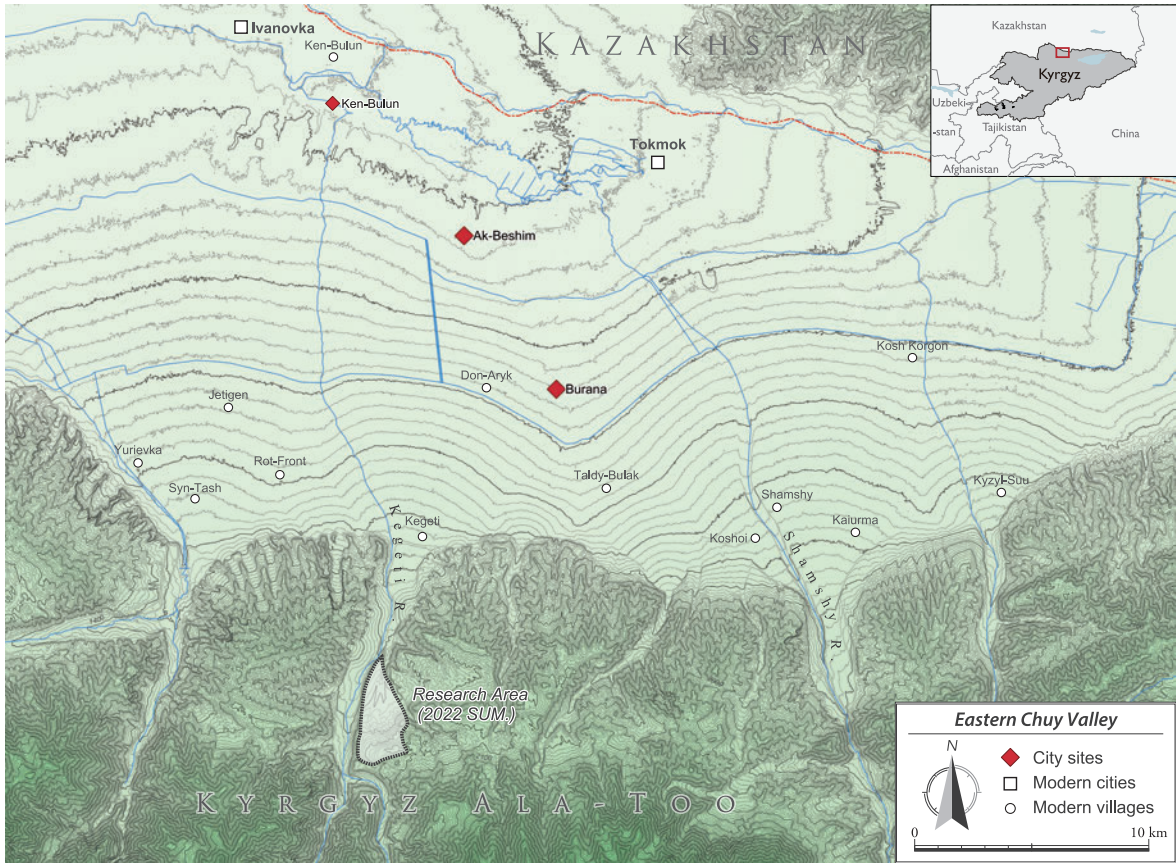


図1 調査地位置図(山藤作成)

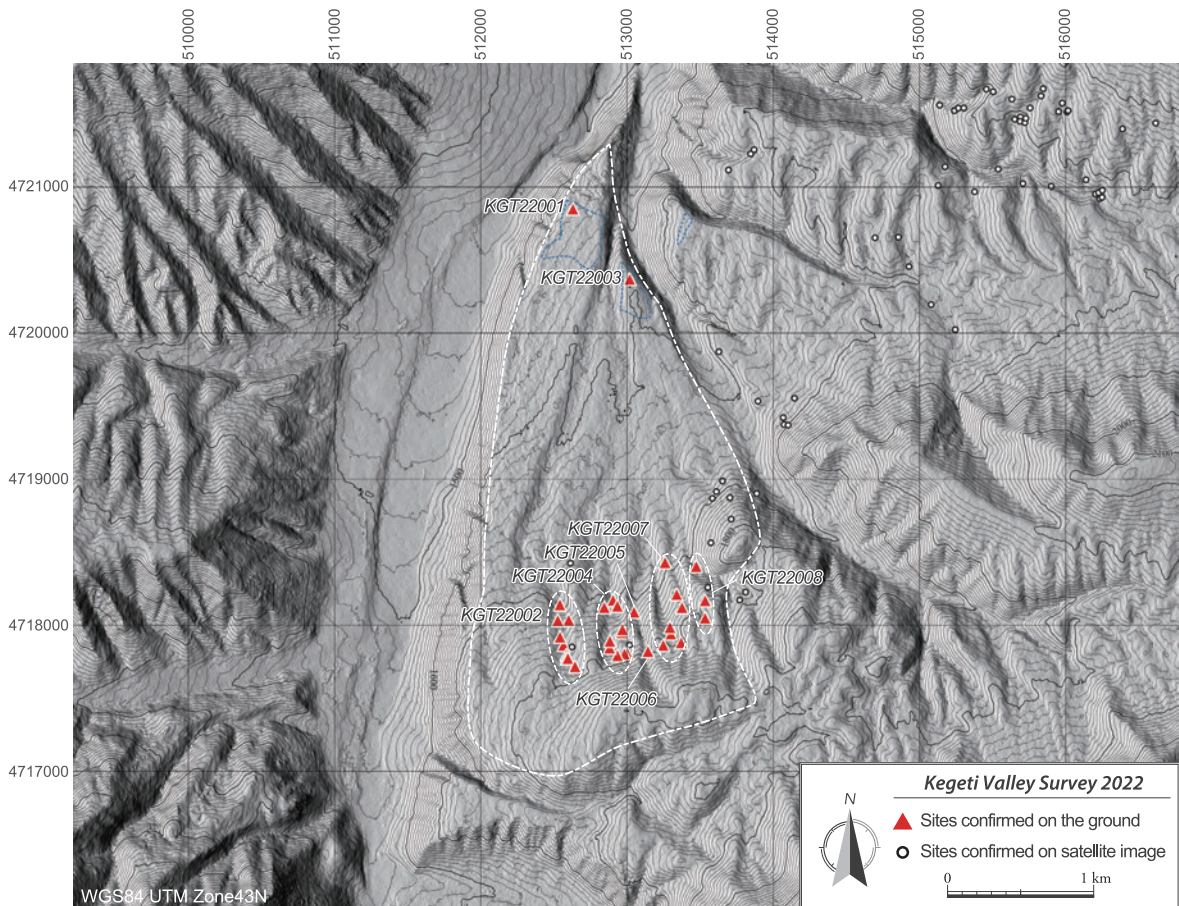


図2 調査対象範囲と登録遺跡分布図(AW3D地形データに基づき山藤作成)

全体地形は南から北へ傾斜している。なお、台地南端部には緩やかな丘陵地帯が続く。本年度は、この台地を調査対象として考古学踏査を実施した。

3. 調査方法

現地調査を実施する以前に、Google Earth 上で地物の事前確認を行った。この結果、200 余りの地物を認めるに至った。地物のほとんどは小型の円形を呈しており、これらの多くは西のケゲティ川東岸と東のシャムシー川周辺に集中していた。本年度調査対象としたケゲティ溪谷では草本類が広く繁茂し、地上からの遺跡・遺構の確認が困難であったため、衛星写真上で事前に確認できた地物を現地で再確認・記録するという調査手法を採った。

確認した各遺跡・遺構において、ハンディタイプ GNSS (Garmin GPSMAP64s) による位置情報の取得、専用シートへの遺跡情報の記録、写真撮影、UAV 空撮を実施した。通例の考古学踏査であれば地表面における遺物の表採を併せて実施するが、今回は草本類による地表面の被覆が障害となり十分な表採が行えなかった。なお、記録した遺跡のうち、詳細な記録の必要性や将来的な調査が見込まれた 3ヶ所 (KGT22001、22002、22003) では小型 UAV (DJI MAVIC AIR) を用いた航空写真測量を実施し、フォトグラメトリによる遺跡範囲全体の三次元データの取得を試みた。

4. 調査成果(1)：墓域

台地北端部において、大小数十基の墳丘墓から成る 2つの墓域を確認した (KGT22001 及び 22003) (図 3)。西側の KGT22001 はケゲティ溪谷内で最大の墓域であり、約 11.5 ha (東西約 380 m、南北約 410 m) の規模を測る。北端部に位置する最も大型の墳丘墓は直径約 50 m にも及ぶ。現在、墓域の中央部分はトラクターによる牧草の刈り取りが行われており、墳丘墓はもはや認められない。しかしながら、衛星画像上では円形のクロープマークが多数見られ、また、地表面でも僅かな高まりが残ることから、元来はこの場所にも墳丘墓が存在していたと考えられる。

KGT22001 の南東方向に位置する KGT22003 は、最大でも約 3.8 ha (東西約 170 m、南北約 360 m) と規模がより小さい (図 4)。約 20 基程度の墳丘墓から成り、このうち 3 基は他に比べて大きく、直径約 30 m を測る。南東部の一部は現在の耕作活動により削平されている。



図 3 KGT22001・22003 全景 (UAV により大谷撮影、北西から)

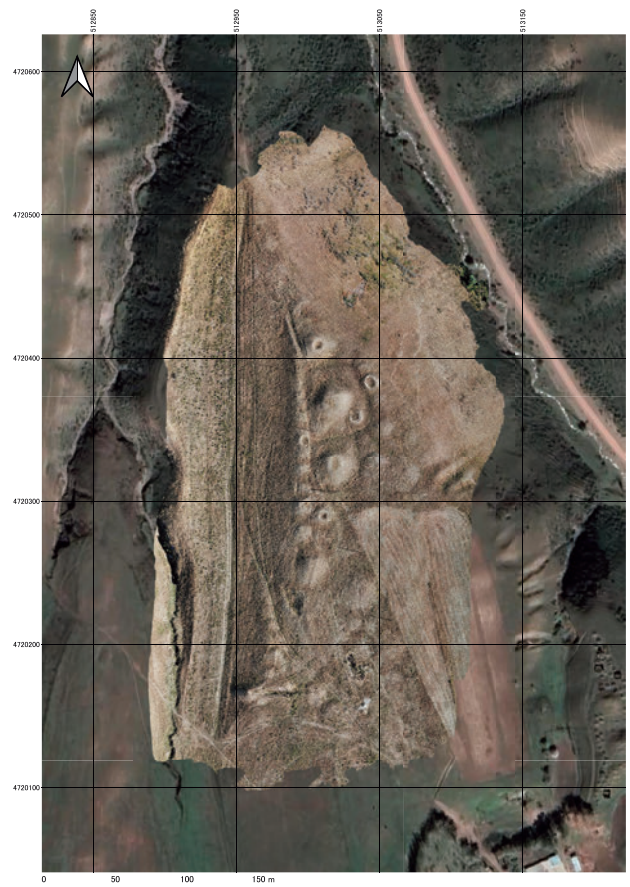


図 4 KGT22003 航空測量図 (1:1,500、望月秀和氏作成)

いずれの墓域においても、多くの墳丘墓の頂部に円形の陥没が見られ、おそらく盗掘の痕跡と考えられる。草本類の繁茂により地表面の観察が困難であり、墳丘墓周辺において遺物の表採を実施できなかったことから、墓域の造営時期は不明である。

5. 調査成果(2)：小型遺構群

台地南部に位置する 7つの小谷において、31 基の小型遺構を確認した。このうち 3つの小谷ではそれぞれ小型遺構の集中が認められたことから、各小型遺構群を単一の遺跡として登録した (KGT22002、22004、



図5 KGT22002 全景(UAVにより山藤撮影、北から)

22007)。これらの遺跡は、7~10基の小型遺構から成る。

小型遺構のうち最も顕著であったのは、小型円形遺構である。この遺構は、直径4m程度の範囲を幅1.5m程度の切れ目のない周溝で囲い、溝の外側に幅1.5m程度の低い外堤を伴う。周溝の内側には平坦面のみが認められた。ほとんどの小型円形遺構は、小谷を取り囲むように緩斜面上に造られていた。

また、KGT22002では、小谷の最奥部において3つの小型平坦面を確認した(KGT22002-2~4)(図5)。これらは、緩斜面上での盛土により造り出された水平面であり、今のところ人為的な作出とみている。現況の水平面はいずれも、直径3m程度と狭小である。なお、KGT22002の小型平坦面は、小型円形遺構の外堤南西辺に取り付くように造られており、両者が同時期に機能していた蓋然性が高い。

上記の遺構の他、長方形遺構(KGT22007-1)や大きめの隅丸長方形遺構(KGT22008-3)を確認した。いずれも小型円形遺構と同様に、幅1.5m程度の内溝と外堤により造られていた。長方形遺構(内寸は東西約9m、南北約3.5m)の南側は、溝・堤ともに存在せず外部に開いていた。また、隅丸長方形遺構(内寸は東西約6m、南北約4m)では、内溝が浅く、北西隅及び南西隅には堤が存在せず通路状に開く。

6. おわりに

本年度は、アク・ベシム遺跡南方のキルギス・アラト山脈北麓を調査対象として、古代遊牧民の活動痕跡を探る目的で、ケゲティ溪谷内の東岸台地における限定的な考古学踏査を実施した。結果として、台地北端部で比較的大きな2ヶ所の墓域を、また、台地南部

の小谷内において31基の小型遺構と少なくとも3ヶ所の集中を確認することができた。いずれもほぼ同時代の遊牧民による所産と見るならば、台地北端部に墓域、台地南部にキャンプ地が所在し、両者の間に広がる牧草地において家畜の放牧が行われていたと考えることもできる。

ただし、墓域・小型遺構群共に時期が不明であり、後者については現段階ではいずれの種類の遺構もその機能が確定していない。しかし、最も数が多い小型円形遺構は、その内寸が概算面積で14~17.9m²に集中することから、特定の機能を有していたと考えるのが自然であろう。その機能とは、遊牧民のキャンプ地における家畜囲いのような、遊牧的生業に深く関わるものであったと推定できるかもしれない。

来年度は、年代と機能を探ることを目的として、小型遺構群の一部で発掘調査を行う予定である。また、ケゲティ溪谷周辺のみならず、より広域における遺跡分布状況を併せて把握することで、ケゲティ川東岸台地をより広い地理的範囲の中で捉える必要もある。さらに、近現代における遊牧活動に関する現地での聞き込みも、現地の遊牧民の行動パターンの解明のみならず、確認した遺構の年代決定という観点からも、実施すべきであろう。こうした一連の調査研究によって、数多く見られた小型遺構群の年代や性格のみならず、ケゲティ川東岸台地とその周辺地域における空間利用や生業の様相をより具体的に捉えたいと思う。

著者らは、JSPS21H04984 科学研究費補助金基盤研究S「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表：山内和也)の助成を受けて本研究を実施した。

参考文献

- ・Bernsham, A. N. 1950 *Труды Семиреченской Археологической Экспедиции Чуйская Долина*. Материалы и Исследования по Археологии СССР No.14. Москва и Ленинград, Издательство Академии Наук СССР.
- ・Кожемяко, П. Н. 1959 *Раннесредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР.
- ・城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・B. アマンバエヴァ 2016「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015年秋期)調査」『Waseda Rilas Journal』Vol. 4 43-71頁。
- ・帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2020『アク・ベシム(スイヤブ)2019』帝京大学文化財研究所。
- ・帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2021『アク・ベシム(スイヤブ)2018』帝

京大学文化財研究所。

・山内和也・B.アマンバエヴァ(編)2016『キルギス共和国チュウ
川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブ

ルン遺跡 — 2011～2014年度—』独立行政法人国立文化財機
構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和
国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。